



バイオマスで日独交流と地域活性化

再生可能エネルギーの日独協力があちこちで生まれているが、その一つがドイツ中西部のプリロン市と、大阪府の能勢町。両自治体は面積がほぼ同じで、どちらも森林資源に恵まれていることから、バイオマスをキーワードに交流が始まった。

プリロンは人口約2万5000人で、世界的に有名な家具用の木版製造会社があるなど、木材加工や製材が盛んである。ドイツ最大の市営林(7750ha)のを有するが、市として活用するようになったのはわりと最近。



市営林から切り出した材木を碎いて木チップにする

市には「シュタットベルケ」といわれる都市公社があり、電力やガス、熱、水など公共サービスを提供している。再生可能エネルギーを推進しており、その一環として地元の森林のバイオマスをいかそうと2010年、木チップによる熱供給所を建設した。発電発熱を同時に行う施設で、近隣に暖房やお湯用の熱を供給する一方、生まれた電力は売電している。

この設備は1.4MW/時の容量を誇り、35%の水分を含む木チップを利用している。熱供給はいわゆる地域暖房といわれるもので、総計2.5kmにわたる地下パイプに湯を巡らせ、学校や介護施設、集合住宅、商業用建物、温水プール、体育館などに提供している。65~95度の湯を絶えず循環させるため、木チップの燃焼室は最大1050度となる。電力と熱を両方活用できるため、エネルギー効率は88%と高い。

同市の位置するノルドライン・ヴェストファーレン州ではペレットや木チップなどの木質バイオマ

スの見本や、それを燃料とする暖房器具の展示室、バイオマス促進のためのセミナー室を有するセンターを設け、森林資源の利用を呼びかけている。

能勢町はプリロンの取り組みを参考に木質バイオマス利用を促進しようと、高校生による日独交流が始まった。

その一環として、今年5月能勢高校で、ドイツの日本大使館勤務の川又孝太郎参事官がドイツのエネルギー政策や地域活性化策について講演した。

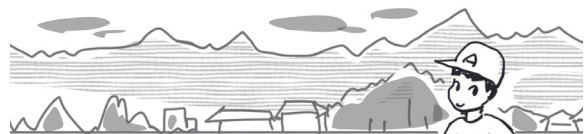
全1年生33人とワークショップをし「能勢町で再生可能エネルギーを増やすべきか」について議論した。来年は高校生によるプリロン視察を計画しており、若い世代の交流が新しい風を吹き込むきっかけになりそうだ。

地元の森林資源を利用することは、石油や石炭など外部の依存をなくし、気候保護に貢献する。地元にお金が回るため、地域活性化につながるなどいいことづくめ。能勢町も日本版シュタットベルケ設立を検討しており、森林利用に期待が高まっている。

ごみかんドイツ特派員 田口理穂

AKIRA の 成長記録

6月末から長野に里帰りし、明は3週間5年生のクラスに混ぜてもらいました。初めて担任が男の先生になり「面白い先生なんだよー。ちょっと忘れっぽいけど」とうれしそう。水泳の授業は週3回ですが、暑くなると4回あり、クロールや平泳ぎを習っています。ドイツの学校にプールはなく、1、2月の体育の授業で雪の中徒歩15分かけて温水プールに行っていました。タツノオトシゴ、銅、銀、金と水泳のレベルがあり、たいていの子は学外の水泳教室で練習して取ります。4、5年生で銅を取るのが一般的で、明も春休みの集中講座



で獲得。200mを泳ぎ、水深3mにある輪を拾い、1mの高さの台から飛び込みました。

それにしても日本の暑いこと！日本はどここの学校にもプールがあり便利だなーと思っていたけど、それは暑さのあまり普通の体育の授業ができないからか。必要に迫られてのことだと今回、認識しました。